「底が突き抜けた」時代の歩き方 253

敵とは我々自らの問いが姿を現したものである－グローバル化の不安

「敵とは我々自らの問いが姿を現したものである」－一時ナチスにも荷担したドイツの国法学者カール・シュミットの言葉であることを、『毎日新聞』（０１．１０．１０）掲載の共立女子大助教授大宮勘一郎の文章のなかで知った。その中でフランスの哲学者ジャック・デリダがアドルノ賞受賞スピーチの最後で、《９月１１日の事件について触れ、衝撃と哀悼は禁じ得ぬが、と断った上で「誰一人として無実ではない」と述べ、またこれと前後して「南ドイツ」紙のインタビューに応え、「ビンラディンはグローバル化の表象」である、と語った》と記されている。

「誰一人として無実ではない」という言葉は、誰一人として無関係な者はいないという響きをもって聞き取ることができる。自分は全く関係ないと思い込んでいる者こそ、最も深く関係しているといわねばならない。なぜなら、事件（たとえばテロ）は最も関係がないようにみえる場所でこそ発生するからだ。あるいは関係ないという思い込みこそが、テロなどの事件のかたちをとって噴出してくるといってもよい。少なくとも世界はそのような構造に貫かれている。だが、「誰一人として無実ではない」ということは、グローバルな感受の仕方であることは間違いない。その感受において、「ビンラディンはグローバル化の表象」という言葉がすでに受けとめられるように思われる。

テロ行為に《アメリカの外交政策への反感のみならずグローバル資本主義への敵意》が認められること、そのテロ行為の主体が姿の見えない集団であることによって、《国家同士の戦争状態に代わり、無国籍的ネットワークとして伏在するテロリズムが無差別に恐怖を遍在させる》時代に突入したことが赤裸々になった、その表象としてビンラディンが浮かび上がってきたということだろう。《不定形なグローバル・ネットワークという、今日我々を例外なく規定している新たな存在基盤に対する不安は、「アメリカ＝グローバリズム」と短絡する反米集団も一般市民も、そして国家アメリカも共有しているであろう。「ビンラディン」という人物は、この不安の表象として浮上し、それは友・敵を問わず広まっている。デリダがグローバリズム批判を一旦留保しつつ冒頭のように語ったのは、この不安を考え抜く知的忍耐を求めてのことであろう》と大宮氏は説く。

グローバル化の不安の表象としてビンラディンが浮上しているなら、今回のテロはまさに「グローバル化の不安」そのものの姿として捉えないわけにはいかない。いうまでもなく「グローバル化の不安」は、世界が無数に口を開いている、目も眩むような断層

の深さを初めてグローバリスムが思い知らされたことに由来する。評論家の西部邁は、各々の断層の底で蠢いているのは「国民の原理」であるというが、それはまた民族の原理、あるいは宗教の原理であるかもしれない。いずれにしろ、表層的なグローバリズムは基層のナショナルなものに手酷く反撃されずにはおかない。つまり、グローバリズムのいいかげんさは骨の髄までのナショナリズムには到底受け入れられず、報復されるほかないのである。

グローバル化の不安は当然、宗教にも貫かれている。橋爪大三郎の『世界がわかる宗教社会学入門』（筑摩書房）を読んだ作家の高橋源一郎は、キリスト教もユダヤ教もイスラム教も「同じ神」であることを改めて思って、こんなことを『週刊朝日』（０１．１０．２６）の連載コラムのなかで書いている。《つまり、キリスト教の神なんですが、天にまします我らの父」ですね。それは知ってる。それからイスラム教の神は？　アッラーの神。そうです。じゃあ、ユダヤ教の神は？　エホバの神。当たり。では、この三人、いや三神の関係は？　みんな一神教だから、本当の神の位置を巡って争っている－と言いたくなるのが人情ですよね。ところが、「それは、おお間違い。神が、三人いるわけではありません。エホバとは being（ありてある者）という意味で、名前ではない。アッラーも『神』という普通名詞で、名前でない。一神教では神は一人だけなので、名前は必要ないのです。つぎに、この三つの神は同一人物。エホバ=父なる神＝アッラーなのです。このことは、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒にも十分意識されています。知らないのは日本人だけです」

するとですね、アルカイダのスポークスマンやビンラディンさんが「アッラーの神に栄えあれ」と言ったり、アメリカの人たちが「ゴッド・ブレス・アメリカ」と歌ったりしているのがそれは同じ神さまのことを言ってるのだということになる。どうなっているのか。いや、神さま自身はこの問題についてどのようにお考えになっているのだろうか。》

高橋氏の疑問は一見目から鱗（うろこ）が落ちるような発見（？）に思えるが、しかし少し考えると、なに言ってんの、と言いたくなるような疑問にすぎない。なぜなら、同じ神であっても、ユダヤ教は別にして、キリスト教にしてもイスラム教にしても、それぞれその同じ神と地上の民との間に媒介物（人）が存在しており、その媒介物（人）が全く異なるから、同じ神であっても全く異なってくるのである。キリスト教はイエスを神の子キリストと信ずる宗教であり、「天にまします我らの父」は神の子キリストと固く結ばれた神とみなされている。当時のユダヤ教の在り方を厳しく批判したイエスをメシア（救世主）と信ずる初期キリスト教の中心信仰は、十字架にはりつけされて死んだ後に復活した神の子キリストによる救いであり、キリスト教の教えはその救いをもたらすものであるから、福音（悦ばしき知らせ）と呼ばれる。

イスラム教はアラビアの預言者マホメットによって創始された宗教であり、キリスト

教より６００年後である。推測してみると、キリスト教は西欧世界に広まったが、中近東のアラブ諸国やトルコ、要するに、砂漠地帯ではたぶん広まらなかった。マホメット以前のアラビアでは、氏族や部族の団結が重んじられ、さまざまな神々が崇拝されていたからだ。従来の神々の偶像を否定したマホメットの出現によって、ユダヤ教が奉じていた天地の創造者である唯一神は、創世主である全能の唯一神アラーとして君臨することになったのである。そしてユダヤ教は律法（キリスト教の旧約聖書と重複）や、タルムード（口伝＝注解の集成）などを聖典として、今日までユダヤ民族に厳格に受け継がれてきている。

キリスト教が自らをユダヤ教から区別するために、神がイエス・キリストを通して全く新しく啓示した人類救済の誓約を書きつづった新約聖書を聖典としたように、イスラム教も自らをユダヤ教から区別するために、アラーからマホメットが受けたという啓示を中心に、戒律・祭儀の規定などを集めた３０編１１４集からなる聖典コーランを編んだ。したがって、日本人は宗教を「死後の世界のことを考える」と思っているのに対して、高橋氏が勉強したように、《キリスト教は「最後の審判の日に、死者も全員復活して、裁きを受ける」、だからそれまで「死者は墓地でねて待っている」だけだそうです。「イスラム教もだいたい同じ」。ユダヤ教はというと「死ねば土くれになってしまう」から「死者などは存在しない」。》

同じ神であっても、神と地上の民とを結ぶ媒介者がイエス・キリストであるか、マホメットであるかによって全く異なってくるのは当然なのである。その端的な例は、キリスト教にとって重要な十字架はイスラム教では全く見かけないだけでなく、中世の十字軍を想起させる忌まわしいものにほかならない。逆に、ラマダンの月に断食をするイスラム教の戒律は、キリスト教では全く無縁のものである。これが不思議ではないのは、同じキリストであっても、カトリックとプロテスタントでは、そこにあらわれるイエス・キリストが大きく異なるのが不思議でないのと同様である。マルクスに対する把握の仕方が共産党や新左翼各セクトの間ではなはだしい違いが生じて、内ゲバをしばしば生みだすのも同様だ。

以上の点から考えても、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教のそれぞれが、最終的には同じ一つの神を信仰しながらも、仲がいい筈がない理由がわかるにちがいない。とりわけ、ユダヤ教が新約の主人公イエス・キリストについてけっして快く思っていないことはすぐに頷ける。たとえば、《ユダヤ教では、マリアからのイエスの誕生がどう伝えられている》かについて、立花隆が『週刊文春』（０１．３．１５）連載コラム「私の読書日記」のなかで、クラウス・シュライナー『マリア』（法政大学出版局）に紹介されている諸説を、次のように取り上げている。

《「タルムード」では、女の頭髪を編むというつまらない職業の女ミリヤム（マリア）が、

大工と婚約していながら兵士パンテラと関係して作った私生児がイエスとされている。「ドルドト＝イェシュ文献」では、ミリヤムはヨハンナという敬神の念の厚い男と婚約していたが、その友人のヨセフという男が横恋慕して、サバトの夜に夜ばいをかけ、ヨハンナと偽って思いをとげた。そのときミリヤムは月経中であったために、はじめ拒んだが、ヨセフは「婚約中なら月経中でも寝てよいことになっている。月経中なら妊娠することはない」と欺し、ミリヤムは「聡明でない女」だったので、その説明をうのみにして関係した。しかし、この後ミリヤムの生活態度は一変して、「言いよる男には、愚かな娼婦のように、いつ何どきでもところかまわず身をまかせ」るようになった。九カ月後、父が誰かわからぬ男の子が生まれた。ミリヤムは恥を隠すため、男と寝たこともないのに子供が生まれたという話を広めた。それが処女懐胎伝説になったという。

これ以外にも、イエスを娼婦の息子としているユダヤ教文献が多いという。

本書によると、中世時代、ヨーロッパではイエスが生まれたときのへソの緒だとか、生後すぐの割礼で切除された包皮だとかいわれて崇拝されていた聖遺物があるという。それだけではない。イエスに授乳するときにこぼれてしたたったマリアの乳といわれる水晶製の器入りの聖遺物（実は白墨をすりつぶし卵白とまぜ合わせたもの）が崇拝されている例もドイツ各地にあった。》

立花氏は最後に落ちとして、《宗教は、どれほど怪しげな伝説と伝承がまとわりついても信じる人は信じるものなのだ》と書いている。

キリスト教文明とイスラム教文明との隔絶については、作家の曾野綾子とクライン孝子が『SAPIO』（０１．１０．２４）で体験的に語っている。

曾野　イスラムというのは砂漠の宗教なんでしょうね。砂漠の文化というのは欠乏にとても強い。水が足りなくても生きていられる。／ところが、アメリカはコンクリートジャングルで、一つ電気がとまったら終わりだという文化。もうちょっと言えば、電気があるということが民主主義を成り立たせる最大の要素なんです。電気がないところに民主主義はない。そういう所にイスラムが存在するんです。もちろんイスラムの全地域に電灯がないという意味ではありません。／では電気のないところの文化は何であるかというと、族長支配。先進国においては、電気がとまった瞬間から民主主義が停止するんです。（略）

クライン　テロ事件後のアメリカ社会を見ていると構造の違いはハッキリしますね。飛行機が飛ばないから、みんなが自動車で移動してガソリンの値段が上がった。アメリカは移動しないと生活できない社会なんだなと。

曾野　そう。アメリカというのは、様々な物資を移動して、その交流のもとに成り立つ文化なんです。ところが、イスラムの多くの土地では、原則としてそこの地域で産するものをそこの地域で食べているわけです。だから、経済制裁をしたって、ほとんど困ら

ない。もともと国民というのは羊を飼って、それで生きている。
クライン　あの強さには感心します。私もベドウィンと一緒に行動したことがあったんですけど、やっぱりすごいなと思った。
曾野　例えばアメリカというのは、ヒューマニズムというのは弱い者を守ることだと考える。違いますからね、砂漠の民では。最後の一滴の水は強い人が飲むんです。それによって淘汰が行なわれる。
クライン　それは私も、ソマリアへドイツ軍と行ってひしひしと感じました。ドイツ軍が生徒たちに紙やノートを配る。すると、大人がそれを取り上げちゃうんです。大人が取り上げてどうしているかというと、今度はそれを警察官が取り上げる。それが砂漠の常識なんでしょうね。
曾野　そういうと、日本人は直ぐに「分かち合えばいい」というでしょう。でも、分かち合ったら足りないのが砂漠なんです。そこなんですよ。／平和を望めばなる、分かち合いましょう、話せばわかる、この三つが日本人のお得意語。
クライン　どこへ行っても通じないのにね。
曾野　どこ行っても通じるものじゃない。分かち合えばいいって、この水を別の人に分けたら、自分のところの羊が生きられない。それでも分かち合いますかということ。事の本質はすべてそう。

曾野綾子はまた、「アメリカ人はガラス箱の世界をつくる。だから、そういったことが分からないんです。／ジハード（聖戦）だって、死ねば来世で天国に行くから。この世が地獄みたいな辛い所だから天国を望むのかなぁと思いますよ。ノミだらけの家に住んで、泥だらけのところに行って、水はなくて、そういうところに住んでいるから、水のほとりに青草が生えてて、美女がいるという世界を夢見るわけ。／アメリカ人なんて今も天国をやってるんだもの」と述べて、人々が居住している条件の隔絶が、その隔絶の深さを跨ぎ越した対話の可能性の困難さを思い知らせてくれる。

グローバル化の底の浅さは今回のテロによって、その亀裂を無数に露出している。最も身近な日本のことについて語ろう。テロによって＜沖縄＞が日本のなかでグローバル化の不安を表象する場所として、思いがけなく浮上することになった。テロ前のこの夏まで、沖縄は「ちゅらさん」ブームに沸き返っていたことを思い起こしてほしい。ところがテロ発生後のいま、攻撃されたニューヨークへの観光客の激減に連動するように、沖縄もまた、厳戒体制を敷く米軍基地の影響で、観光客が激減した。グローバル化の不安がまたたくまに伝播し、テロなどと全く関係のない筈の沖縄がテロに直撃される虞のある米軍基地を意志に反してかかえこまされていることによって、とんだグローバリズムのとばっちりを受けてしまったのである。もちろん、問題はそのことにだけあるのではない。

日本人の観光客がテロに直撃されたニューヨークを敬遠するのは当然かもしれない。世界中の観光客もそうしているだろうからだ。しかし、テロに直撃されたわけでもない沖縄を、米軍基地が存在しているという理由のみでもし日本人が観光を敬遠しているとすれば、これは一体なにを意味するのだろう。明らかに日本人の観光客は、テロに直撃されたニューヨークとテロに直撃されたわけではない沖縄を同列に置いたのである。いや、彼らは沖縄をニューヨークと同一視することによって、日本のなかから忌むべき場所として沖縄を切り離してしまったのだ。本当は米軍基地を沖縄に押しつけることによって、これまでずっと沖縄を日本から切り離していたのだが、まやかしの本土復帰ブームが演出される中で、今回のテロは露骨なまでに本土が沖縄を切り捨てていたことを浮き彫りにしてみせたのだ。この事態は、米軍基地の存在によって本土などと較べものにならないほどアメリカと運命的につながっている沖縄を、なにかが起こる度に本土は切り捨てることを意味している。有事の際には人はなりふりかまわず正体をさらけだすものだが、今回の沖縄観光客の激減という事態は日本にとって緊急的な有事ではないにもかかわらず、予断が促すムードのなかであっけなく本土人の正体をさらけだしてしまったのだ。〝平和で美しい島〟の謳い文句が一転して、〝最も危険で攻撃されるかもしれない島〟に変わってしまったのである。よく考えると、沖縄は第二次大戦時も、それ以降もずっと、日本本土にとっては最も危険な激戦地であった筈だ。日本から遠く離れたニューヨークへのテロは、日本本土からも沖縄が遠く離れた場所にあるという、日本内部のグローバル化の不安を直撃したといわざるをえない。

２００１年１１月１１日 記

ＴＯＰに戻る